

SPECIAL ELDERLY NURSING HOME



昭和23年、高津刈良氏によって創設された財団法人同胞互助会が昭和27年に社会福祉法人へと組織変更。昭和34年に養護老人ホーム「偕生園」を、昭和39年に東京都第一号の特別養護老人ホーム「愛全園」を開設。以後、在宅サービスも展開し、高齢者の尊厳を守る良質な介護と医療に取り組む

●東京都昭島市田中町2-25-3 ●tel.042-541-3101
●定員:特養112名、ショートステイ20名 ●https://www.aizenen.jp

施設紹介

📍 東京都昭島市

社会福祉法人 同胞互助会

愛全園

第1回

施設最前線

全国

わたしたちの
今日・明日・未来



▲高齢者のフィットネスジムといった趣の機能訓練室

この方にお話をうかがいました



丸山 和代さん

社会福祉法人 同胞互助会 愛全園 業務執行理事、統括施設長。小学6年生の時、初めて愛全園で身体介護のボランティアを経験。介護ケアの尊さに感動し、この道を志す。プロコーチとしても活動中。座右の銘は「すべての出来事に感謝」



▲自宅に帰っても元気で過ごせるよう、デイサービスセンターでは歩行や立ち上がりなど機能訓練に力を入れている

大切なのは、高齢者を尊ぶケアを施設全体で続けること



①センターには、図書室も。蔵書は毎月増え、現在約1000冊だという ②常駐するPT(理学療法士)の指導のもと、筋トレに励む利用者ら。車椅子のまま利用できるマシンもある ③季節感あふれる塗り絵を仕上げ、笑顔で見せてくれた利用者の女性。デイには昭島市中から高齢者が集まる ④今春導入された玉川温泉の足湯浴。石の上に足を乗せていると体中暖まると利用者からの人気が高い

リハビリの概念を取り入れた 東京都認定第一号の施設

JR昭島駅から徒歩圏内の静かな環境のなかに建つ社会福祉法人同胞互助会愛全園。同園における高齢者ケアの歴史は古く、敷地内には東京都認定第一号である特別養護老人ホーム「愛全園」を始め、養護老人ホーム「偕生園」、デイサービス、シヨートステイ、地域包括支援センター、診療所など、高齢者に特化した17の事業所があります。「愛全園が誕生した昭和39年当時、日本にはまだリハビリという概念がなく、体の弱った高齢者の多くは寝かせぎりの状態でした。それではいけないと、当園では食事のたびに入所している方々を食堂にお連れして、端座位で食べていただくようにしました。高齢者の尊厳を守るという創設時の考えを今も大切にしています」と話すのは、業務執行理事で施設長の丸山和代さん。運営母体である社会福祉法人同胞互助会の法人理念は「老いの装い支援」。老いてもなお毎日装いたくなる気分になれるように支援するというその

言葉の通り、ここでは利用者の「快眠・快食・快便・快感」にアプローチしたケアが重視されています。

「快眠・快食・快便・快感」を 叶える個別ケアを実践

「睡眠リズムの乱れた方に睡眠薬を使用するのはなく、適度な運動や脳機能訓練を取り入れるなど日中の過ごし方を見直すことで、睡眠リズムを整えていただいています」と話す丸山さん。また、「食事は日本人の昔ながらの食材を意識した献立を自家厨房で作り、ご利用者の『快食』を目指しています。そして食べたらずの健康の基本。当園では日々の便の状態を観察し、漢方薬を適切に用いることで排便コントロールを行い、『快便』につなげています。その上で大切なのが『快感』です。ご利用者の生活歴を理解し、趣味や居室環境の設定など細やかな個別ケアを徹底して心地よさを得られるサービスを目指しています」。次ページからは、同園の個別ケアの取り組みや課題などについてご紹介します。

「一番古い施設だからこそ、一番新しいことをやらなければ」

施設長・丸山 和代さん



人の個性が花開く場所を
見つけることが自分の役割

自家厨房で手作りした

凍結含浸食でQOLの向上を

「当園では、2013年まで嚙む力が衰えたご利用者に刻み食やミキサー食をご提供していました。しかし、『もっと通常食に近い食事を食べてもらいたい』という現場の声を受け、見た目が普通で、かつ舌でつぶして食べられる食事にできないかと考え、試行錯誤の末に2014年、刻み食を全廃し、凍結含浸食を自家厨房で作ることに成功しました」。

凍結含浸食とは、広島県が特許をもつ分解酵素を使った調理法で、食材に酵素を浸み込ませ、食材の見た目や風味はそのままに、舌と上顎でつぶせるほど軟らかいのが特徴です。

導入にあたっては初期設備の投資やスタッフへの理解が必要でしたが、はじめる以上、ある程度の投資は必要と割り切った上で、従来の調理設備を生かすなどして割高化を回避。また、管理栄養士が中心

となって凍結含浸食の試食会や講習会を開き、必要性を周知させていったといいます。

「現在、当園では介護食だけでなく看取り食でもその方に合わせた個別対応食を用意しています。こうした取り組みもNST(Nutrition Support Team)栄養サポートチーム活動の一環なのです」。

NSTとは、利用者の栄養状態を評価し、適切な栄養療法を提案し、実施する取り組みのこと。主に急性期病院で行われているイメージがありますが、同園ではほかの特養に先駆けて、2011年からNSTをスタート。現在、管理栄養士が主体となり、医師や看護師、介護福祉士らが参加して、毎週水曜の午前中に1時間のNSTラウンドを実施しています。そのなかで利用者の食欲や体重だけではなく、病態、褥瘡の状態なども確認し、終了後はそこで得た情報をほかのスタッフと共有し、全体のケアに役立てています。「NST導入前は多業種間のコミュニケーション不足による対応の遅れが課題でしたが、おかげで今はスムーズな連携が可能になりました」。

丸山さんの信条は、「東京で一番古い施設だからこそ、一番新しいことをやっていく」こと。それを利用者の満足・納得につなげるには、高齢者へのケアを自分事ととらえることが大事だと言います。

「つまり、スタッフ自身が『快眠・快食・快便・快感』であること。ですから、私は常々、まずは自分を大切にしてほしいとスタッフに伝えています」。

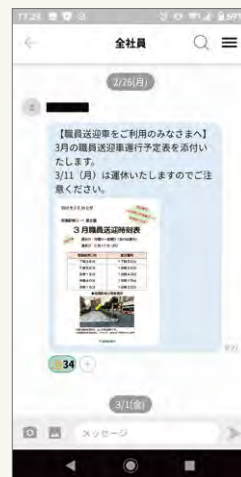
そのために自分ができることは個々のスタッフの長所を見極め、個性が輝く場所を作ることだと丸山さんは話します。

「例えば、植物が好きなスタッフなら花壇の管理を任せてみる。すると本人も楽しいし、同じ趣味の利用者が周りに集まってきたり、マニュアルではない交流が生まれます。もちろん、それがすぐによい効果につながるわけではありませんが、諦めず継続することが大切です」。

ほかにも施設全体をWIFI環境とし、社内SNSでスタッフ間コミュニケーションを活性化させ、YouTubeで施設の活動を紹介するなど、介護の世界にさまざまな新風を吹き込む愛全園。この春からは、福祉人材の裾野を広げる地域プロジェクトも始動します。



▲週一回開催される特養のNSTラウンドでは、利用者の状態変化の確認を行うとともに、要望や希望を直接聞くことで迅速なケアにつなげている



▲コミュニケーションアプリ「HR Ring」を使って、スタッフのこころとからだの状態を見える化する取り組みも実施



▲スポンジにゼラチン溶液を浸み込ませて作った「愛全園ケーキ」も凍結含浸食



▲凍結含浸食の見た目は常食とほぼ同じ。摂食嚥下障害の人でも食事を楽しむことができる



▲酵素を浸み込ませて食材の柔らかさを調整できる凍結含浸食。特養をはじめ、デイやショートでも提供されている

連載

くわしたたちの今日・明日・未来へ 全国施設最前線

こぼればなし

プロコーチとして悩みや課題の解決をサポートする専門家でもある丸山さん。取材中にうかがった介護ケアに役立つお話をご紹介します。

自己対話力を高める

「自己対話力とは、自分が自分に質問して答える能力のこと。この力が身につくと、自己肯定感が上がり、やるべきことが明確になります。介護の現場では、自身の課題を解決する力につながります」。

トライ&サクセス

「よくトライ&エラーと言いますが、大切なのはトライ&サクセス。やってみてダメなら少し考え方や方向を変えてやり直す。そのままうまくいかないからと、諦める必要はありません」。

違和感体験を大切に

「キャリアを積み、リーダーになるほどに盲点が出てくるもの。それに気づかせてくれるのが、日常のなかの違和感体験。何かおかしいと感じたら、それに対してどんな具体策をとるかを考えましょう」。

タイミングを重視する

「何事にもタイミングがあります。特に、介護の現場では、ご利用者を待たせないこと。2日間便が出ないなら、すぐドクターにつなぐ。あとでやろうではなく、今やる意識をもつことが大切です」。

～奨励賞を受賞して～

介護福祉士

中嶋直樹さん

インタビュー

デイサービスと シヨートステイの連携で、 利用者の自立支援を促進



中嶋さん(右)の座右の銘は「継続は力なり」



▲車に添乗して利用者を自宅へ安全に送り届けるのも、キャリアの長い中嶋さんの大切な業務



▲エレベーター内の季節感溢れる装飾は、スタッフが自ら提案して手作りしたものだ



▲丸山さんと並び、満面の笑顔を見せる中嶋さん。「今よりさらにこことからだ元気になるデイにすることが私の目標」と話す

— この事例研究をするに至った背景を教えてください

きっかけは、長くデイサービスセンター(以下、デイ)をご利用いただいていたAさん(96歳)が脳梗塞で半年間入院したのをきっかけに、要介護2から5になり、常時オムツ着用になったことです。しかし、退院翌日にデイにいらした際、ご本人が自分でトイレに行きたいと言われたことに胸を打たれ、皆で支えられないだろうかと思いました。

— どのような取り組みをされたのでしょうか？

まず、PTにAさんの状態を評価してもらったところ、運動項目と比較して認知項目の評価が高く、ご本人がリハビリに意欲があることがわかりました。そこで、現状の便秘を改善するために主治医に相談して下剤を調整してもらい、デイ利用時にはオムツをリハビリパンツに替えて、ご自分でトイレに行くためのリハビリを通し、Aさんの自立支援を行うことにしました。

— リハビリの内容はどのようなものですか？

Aさんは左半身に麻痺がりましたが、PTの機

昨年開催された「第1回全国老人福祉施設大会・研究会議 JSフェスティバル in 栃木」において、昭島市高齢者在宅サービスセンター「愛全園」の介護福祉士、中嶋直樹さんの「多職種連携によるシームレスな支援」についての事例研究が奨励賞を受賞しました。ここではその内容とともに、中嶋さんに介護ケアへの思いをうかがいました。

能評価をもとに、麻痺側と非麻痺側の下肢筋力の向上を目的に、機能訓練室のマシンを使って、立ち上がりや歩行の練習を行いました。

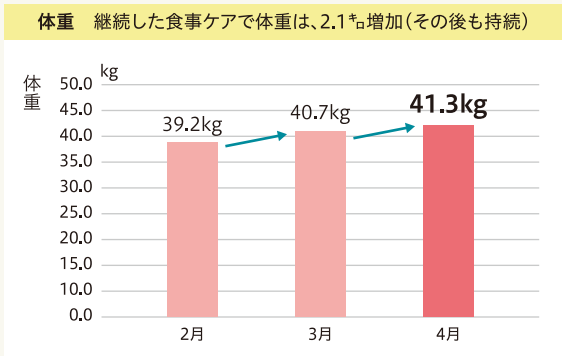
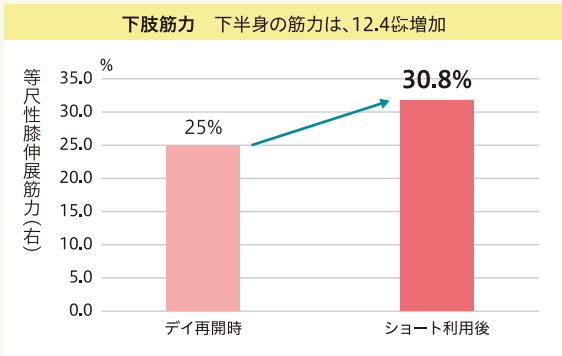
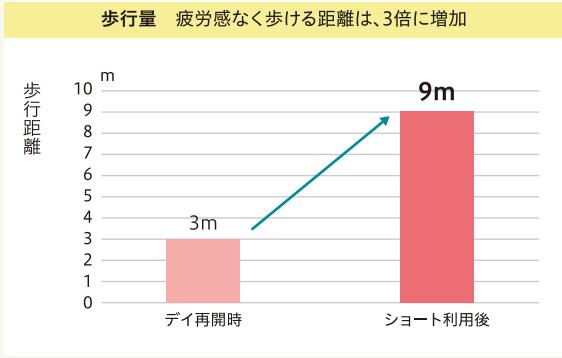
— 変化はどのように現れましたか？

最初の二週間はリハビリによる疲労で、夜中ご自宅で痛みを訴えられたり、体力が低下して食事量が減ったり、よくない変化がみられました。この時期はご家族も不安だったと思います。そこで我々はご家族をケアする意味で、デイでの小さな変化をフィードバックするように努めました。

ただ、デイではご利用日の日中しか我々は介入できません。そこで、ご家族とAさんにデイとシヨートステイを組み合わせて、同じ機能訓練をしてはどうかとご提案をしたのです。

— つなぎ目のない支援を図るといっていいですか？

そうです。当時、Aさんのご家族はこの先の在宅介護をどうすればいいのか悩まれていたので、我々がこの話を持ちかけると、ご快諾いただけました。そこからデイとシヨートステイの交互利用を通してシームレスな連携を図り、身体機能を高めると



多業種連携による
Aさんの変化



▲Aさん(96歳)。つなぎ目のない支援の結果、ご本人の発語と笑顔が増え、ご家族の負担が軽減した



▲デイとショートの交互利用を続けて2か月経つと体力が付き、一日のうち7時間は離床できるようになった

ともに、ご本人に合った介助法をご家族にお伝えすることになりました。

——連携の工夫について教えてください

相談員がAさんの様子を互いの施設に報告するほか、PTや介護福祉士、看護師などがご利用日の夕礼にミーティングをもち、情報を共有しました。また、Aさんのリハビリの様子を写真や動画で撮影し、法人内のLANでスタッフが共有し、ご家族にもそれをお見せできたのは大きかったですね。

——そこからのAさんの変化は、いかがでしたか？

まず、継続した食事のケアで食べる量が増え、体重が2か月で約2%増加しました。また、下肢筋力も約12%増加、疲労感なく歩ける距離も当初の3倍から9倍に増えました。その結果、ご自宅では毎日7時間離床することができるようになり、ご家族の負担も軽減しました。ご本人に笑顔が増えたのが、何よりも嬉しいことでした。

——最後に、今回のシームレスな支援で得た気づきと、今後への思いを教えてください

今回よい結果が出せたのは、デイで問題点を見逃さなかったこと、問題と捉えるタイミングを逃さず、スピード感をもって対応できたこと、そして多職種連携が事業所の内外でスムーズに行えたことが要因だと思います。連携とひと言で言っても簡単なものではなく、今も試行錯誤を続けていますが、結果を出すにはどうすればよいかを皆で考え、熱量をもって思いを伝えることが大切だと思います。